



徳島県立総合大学校広報紙

# まなびーあ徳島便り

第12号  
編集・発行  
徳島県立  
総合大学校

## 優しい者だけが強くなれる

平成28年7月16日(土) 徳島県自治研修センター(徳島市)で、徳島県出身で元ラグビー日本代表の林敏之さんによる「ラグビーに学ぶ」感即動」と題しての記念講演がありました。

(参加者116名)



### ラグビーとの出会い

中学2年生のときにラグビーを始めました。高校では全国大会に出場できませんでしたが、3年生の夏休みに全日本高校代表のオーストラリア遠征のメンバーを選ぶ合宿に呼んでもらいました。当時の私にとって全日本高校代表は雲をつかむようなものですが、全国優勝を目指すような人たちに圧倒されながらもオーストラリア行きのチケットが欲しくて必死でがんばりました。しかし、最終選考で

もらったジャージの背番号は15より大きく、スクラム練習に入れてもらえませんでした。「俺にもスクラム組ませてくれ」と、居ても立ってもいられない気持ちの中で与えられたチャンスに、渾身の力で相手にタックルして見事に決めることができました。そしてこのタックルのおかげでメンバーに選ばれました。

この遠征では山口良治先生というすばらしいコーチとも出会い、命を懸けて戦う熱いラグビーを教えてもらいました。帰国前日には、山口先生から外国人に通用したのはお前だけだ。5年10年後俺の後を継いでくれという言葉をもらい、うれしくてうれしくて先生の胸に抱きついて泣きました。

この出来事を書いた日記はその後の人生の道しるべにもなりました。現役引退後、沸き上がるような感動を伝えたいなと思ひ、社員教育などに携わる中、10年前に「みんなに人生のヒーローになってもらいたい」支援の気持ちからNPO法人を立ち上げました。今思えば、あの遠征が私とラグビーの本格的な出会いだったのかなと思います。



### 悔しさをバネに飛躍

同志社大学に入学した当初は、親元を離れての寮生活と厳しい練習から、体重も落ち、きつい日々でした。夏合宿では、何百本というスクラムを組み続けて練習を終わらせない先輩に対し、悔しさのあまり「足を引つ掛けて倒し、スパイクで顔を踏みつけてやるう」としたこともありました。長い練習が終わった後宿舎で、一緒にスクラムを組んでいた4年生の先輩に「1年生にはかわいそうだったな」と言われた途端、不意をつかれたように涙が出ました。けがで練習を休んでいる仲間がうらやましくて、自分もけがしないかなと思つたこともありました。そういう日々を何とか過ごしながら、少しずつ自信ができ、合宿の終わりに1軍のメンバーにも入れるようになりました。1・2年の時に大学選手権で負けてみんなで泣きましたが、3年生の時には優勝することができました。

入社した神戸製鋼も最初は強いチームではありませんでしたが、みんなががんばって7年かけて日本一になり、7連覇を果たすこともできました。

勝つて、負けて、涙をいっぱい流しました。うれし涙と悔し涙、どちらも私には大事な思い出です。

みんなの幸せのために行動しよう  
ラグビーはボールを託し、託されるスポーツです。仲間を信じていることができないとパスはできません。ジャージを着られない同じポジションの仲間が、自分にどんなプレーをしてほしいと思つているか、どんな思いで見守っているか、それが分からない人によいプレーなんてできるわけがありません。優しい者しか強くなれないのです。

そして、ヒーローというのは、「みんなの幸せのために行動できる人」ではないかと思ひます。

私は「ONE FOR ALL, ALL FOR ONE」(一言で言えば和)という言葉が大好きです。人のために何ができるか、という精神です。人のために何かしたいと思えるのは感謝の気持ちがあるからです。どう感じ、どう動くかによって、自分の人生が決まるのです。

講演を聴いて  
たかがラグビーされどラグビー。参加者、特に県内の高校ラグビー部員に、時に熱く、冷静に「俺の後に続け」と語りかける燃える思いが肌に伝わり心を動かされました。

### とくしま学博士による論文発表

林敏之さんの講演に先立ち、とくしま学博士の後藤田洋次さんによる「南海トラフ巨大地震」今からでも遅くない防災・減災対策」と題する論文発表がありました。







